

ペンギンてう
片吟鳥の話

—日本との関わりを中心に—

平成8年7月22日～8月23日

ペンギンは、姿形、しぐさ、歩き方など、その愛らしさで多くの人々を魅了してきました。今回の展示では、日本とペンギンの出会いを中心に、それにまつわる心楽しい本を幾つか集めました。

今まで知られていなかったペンギンの話に思いを深くしていただければ幸いです。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

[ペンギンの種類とその生態]

1. イラスト・アニマル—動物細密・生態画集—

碧山晃〔ほか〕画 東京 平凡社 1987(昭62) 534p <RA6-53>

何種類のペンギンがこの地球上に存在するのかという問題については、鳥類学者の間に意見の一致が見られておらず、16種から18種のあいだといわれている。なお、1988年夏ニュージーランドで開催された第一回国際ペンギン会議に出席した研究者の間では、18種類におちついた。

2. ペンギンになった不思議な鳥

ジョン・スパークス、トニー・ソーパー著 青柳昌弘、上田一生訳 <RA567-E230>
東京 どうぶつ社 1995(平7) 327p

《ペンギンの分布と主な営巣地》

ペンギンの営巣地は、南半球の寒冷な海域にほぼ一致しているものの、17種のうち11種のペンギンは、南回帰線付近のより高温な地域で繁殖する。ペンギンといえば南極を連想する人が多いが、生息地が南極に限定されているのはわずか2種類のペンギンだけである。

3. 科学朝日 第55巻3号
東京 朝日新聞社 1995(平7.3) <Z14-73>
4. トータルペンギン
ジェームス・ゴーマン文 フランス・ランティング写真 <RA567-E127>
沢近十九一〔ほか〕訳
東京 リプロポート 1991(平3) 183p
《いろいろなペンギンのヒナ》
卵からかえったばかりのヒナは、ふわふわとした毛で覆われている。ヒナは親に餌をねだるが、親ペンギンは自分の子ども以外のヒナに餌を与えることはない。
5. ペンギン大陸
岩合光昭写真・文 <KC726-E843>
東京 小学館 1992(平4)
《海の中を飛んでいるキングペンギン》
6. ペンギンはなぜ飛ぶことをやめたのか
田村和治著 <RA567-E169>
東京 実業之日本社 1993(平5) 224p
ペンギンは水面上を進むときは飛びはねるようにして泳ぐ。俗にいうイルカ泳ぎである。それはペンギンが肺で呼吸しているために、定期的に浮上して呼吸をしなければならないからである。
7. ガラパゴス一時を忘れた生き物たち—
藤原幸一写真・文 <RA482-E2>
東京 データハウス 1993(平5) 158p
《ガラパゴスペンギン》
ペンギンの仲間のなかで、3番目に小さい種類。赤道直下で生息している。
8. ペンギンたちの写真集
ウォルフガング・ケーラー写真・文 大沢類訳 <RA567-E137>
東京 リプロポート 1991(平3) 79p
《イワトビペンギンとマカロニペンギン》
イワトビペンギンはテレビ等でお馴染みのペンギン。CMの中ではとてもかわいらしいが、実際は、ペンギンのなかで最も攻撃的な種。侵入者に対しては満身の怒りをこめて襲いかかる。マカロニペンギンは、イワトビペンギンによく似ておりしばしば混同される。イワトビペンギンよりも体が大きい。

9. 新どうぶつ記—朝日新聞日曜版— 4巻

朝日新聞日曜版「新どうぶつ記」取材班著 <RA454-E2>

東京 朝日新聞社 1990(平2) 143, 4p

《ケープペンギン》

分布は、南アフリカ沿岸に限定されている。近年、石油汚染により被害をうけるようになった。ケープタウンには、市民によるペンギンの救助組織「南アフリカ海鳥保護基金」の救急センターがある。

10. ペンギン物語

ダグ・アラン写真 藤原幸一文 <RA567-E192>

東京 データハウス 1993(平5) 63p

《コウテイペンギンとそのヒナたち》

コウテイペンギンは体長 120cm、体重 23~45kg。最大級・最重量の海鳥である。繁殖地は南極大陸に限られる。コウテイ、キング、アデリー、ヒゲ、ジェンツーそしてイワトビ等のペンギンのヒナたちは、成長し動きまわれるようになると小さなグループを組む。まだ親がかりのヒナたちによって構成されるこの集団をクレイシ(集団保育所)という。

〔南極のペンギンとの出会い〕

11. 南極探検私録

多田恵一(春樹)著 <YDM26988>

東京 啓成社 1912(明45) 400p

《日本人で初めて南極探検をした白瀬隊の隊員の絵日記》

明治 45 年 1 月 28 日、秋田県出身の白瀬中尉を隊長とする「日本南極探検隊」(27 人)の陸上突進隊は 2 台の犬ぞりで南極ホエール湾奥の大氷堤に到着した。そして氷原に日の丸を立てるとともに、見渡すかぎりの一帯を「大和雪原」と命名して帰国の途についた。著者は、白瀬中尉の南極探検計画を報じた新聞を見て、真っ先に駆けつけ、探検隊では書記長をつとめた。だが、白瀬中尉と決裂し、帰国 1 日前に除隊している。

12. 南極記

東京 南極探検後援会 1913(大2) 468p <297.9-N627n>

《南氷洋でペンギンを捕らえ、記念撮影》

南極探検後援会の会長は、大隈重信伯爵であった。この記録の中にはペンギンを食べた話もあり、「味噌煮の為めか一寸賞味に値した。」とのことであった。

13. 雪原に挑む白瀬中尉
渡部誠一郎著 <GK129-E49>
秋田 秋田魁新報社 1991(平3) 300p
《南極探検隊記念碑のペンギン》
港区芝浦・埠頭公園に「南極探検隊記念碑」がある。昭和11年11月、白瀬南極探検隊の壮挙25周年を記念して建立された。石碑の両端には、ペンギンが一羽ずつ配されている。
14. 南極探検日記 上巻
多田恵一〔著〕 <GJ151-E6>
東京 ゆまに書房 1993(平5) 360p
《明治天皇に献上された^{ペンギンてう}片吟鳥》
本書は復刻版であるが、大正元年8月刊行の原本(当館請求記号<332-321>)もある。
15. 南極探検私録・南極土産片吟鳥の話
多田恵一〔著〕 <GJ151-E7>
東京 ゆまに書房 1993(平5) 523p
11と同じ作者で、南極探検で持ち帰ったペンギンを天皇に献上した話や、南極のペンギンの生態についての話が載っている。これは復刻版だが、原本は大正元年8月に刊行されている。
16. アサヒグラフ 昭和31年新年特大号—南極探検特集—
東京 朝日新聞社 1956(昭31) <YA-98>
《フランス隊の記録映画の中のコウテイペンギン》
第一次日本観測隊の出発を前に組まれた特集。白瀬中尉の記事のほか、フランスの南極観測隊が撮ったコウテイペンギンについての記録映画が紹介されている。
17. 南極新聞
東京 南極研究会 1957(昭32) 217p 図版17p <297.9-N627n2>
第一次観測船「宗谷」のなかで、毎日発行された船内新聞。
18. ペンギン日記
朝比奈菊雄著 <297.9-A836p>
東京 読売新聞社 1957(昭32) 202p
「もし、ペンギンがいなかったら、南極はどんなに殺風景なところだろう。」という書き出しで始まる。著者は、第一次観測隊の隊員で、「南極新聞」の発行者である。

19. 南極大陸—日本観測隊の写真記録—

東京 朝日新聞社 1957(昭32) 図版108p <297.9-A839n>

昭和32年1月29日、第一次観測隊が南極の地に第一歩を記し、東オングル島に「昭和基地」を開設した。白瀬隊の探検から45年。日本の南極地域観測事業は、国際地球観測年の世界的な共同事業の一環として始められた。

20. ペンギン—南極からの手紙—

青柳昌宏著 <RA567-148>

東京 平凡社 1981(昭56) 81p

昭和53年11月から2ヶ月間ペンギンの調査のため南極に訪れた研究者が家族へ向けて書いた手紙。

21. 南極観測二十五年史

文部省編 <M85-18>

東京 文部省 1982(昭57) 532p

〔日本へ渡ってきたペンギンたち〕

ヨーロッパでペンギンが知られるようになったのは16世紀頃で、オランダの船乗りたちがマゼランペンギンについての詳しい情報を持ち帰ったことがきっかけとなり、科学者の間で研究がなされるようになった。日本にペンギンがやってきたのは、24の文献が鍵を握っているようである。

22. 観文禽譜

堀田正敦編 写本 1794(寛政6) <特7-9>

《18世紀の日本に於ける情報》

堀田正敦は、仙台藩主伊達宗村の八男で、優れた行政家であっただけでなく、文化人で、和歌や国文学、歌集に詳しく本草学にも関心があった。この本は、堀田がまとめた優れた鳥類の解説書である。

☆ジャガタラ国(現インドネシア)におり、形は「パリケン」のようで、頭、頬は黒く、目や胸、腹は白く、くちばしは鳩に似ていて、長く大きく黄色である。翼は黒く足は翠にちかいとある。「パリケン」とは中南米の鳥で、アヒルの一種である。

23. 図説日本鳥名由来辞典
菅原浩, 柿沢亮三編著 <RA2-E48>
東京 柏書房 1993(平5) 622, 26p
24. Museum No. 524
東京国立博物館編 ミュージアム出版 1994(平6.11) <Z11-186>
22で紹介されている堀田正敦の著作『堀田禽譜』のなかの「ペンギン」の頁が掲載されている。『堀田禽譜』は、22よりも後に作られたもので、解説付きの鳥類図譜としては第一級のものといわれている。(東京国立博物館所蔵)
25. 本草写生図譜 5 獣・鳥禽
山本溪愚筆 京都 雄渾社 1982(昭57) 77図 <YP19-258>
《本草学に見るペンギン》
幕末から明治時代初め頃、本草学を修めた山本溪愚が伊勢の豪商西村廣休のために模写したもの。
26. (具氏)博物学 第7巻
ゲートリッチ著・須川賢久訳 東京 文部省 1877(明10) <YDM57109>
《明治初期の小学生徒のための博物学教本》
アメリカのグードリッチ著『Victorial Natural History』を訳したもの。「^{ペンギン}企鵝」と表記されている。
27. 動物渡来物語
高島春雄著 <480.49-Ta391d>
東京 学風書院 1955(昭30) 218p
28. 上野動物園案内
東京帝室博物館編 <92-182イ>
東京 東京帝室博物館 1919(大8) 66p
29. うえのどうぶつえんのあゆみ—最近の二〇年を主として—
東京 上野動物園 1962(昭37) 78p <480.76-U421u>
《ペンギンの病気(カビ症)に効く薬とは?》
当時、日本にやってきたペンギンの致命的な肺の病気であるカビ症を、水虫の薬によって予防することに成功したことが記載されている。
30. 動物園うら話
山本鎮郎著 <480.49-Y348d>

神戸 中外書房 1960(昭35) 218p

《昭和のペンギン大移動》

17の資料にもあるように、昭和30年頃から、捕鯨船によってたくさんのペンギンたちが日本に運ばれ、各地の動物園や水族館でお目見えするようになった。当時としては大がかりな冷房設備、空気清浄機のある施設が建てられたこと等が述べられている。

31. ペギーちゃん誕生—ペンギンを育てる—

白井和夫著

<RA567-81>

諫早 昭和堂印刷出版事業部 1976(昭51) 188p

《水族館での2世誕生秘話》

昭和34年に開館して以来多くのペンギンを飼育してきた長崎水族館での、まだ飼育法が確立していない頃のペンギン飼育、特に2世誕生にまつわる苦労話。

32. 私は動物プロフェッショナル

畑田国男著

<RA411-E52>

東京 平凡社 1992(平4) 265p

《現在のペンギン・ショーの内容》

大洗水族館のフンボルトペンギンの飼育係の記録で、初めは、肥満防止等のためにペンギンを調教していたが、やがてはペンギン・ショーが開かれるまでになった話。

◎11, 16, 26 は、マイクロ資料でのご利用になりますので、展示期間中でもご利用になります。

📖片吟鳥の読みは、15. 『南極土産片吟鳥の話』の本文中のふりがなを採りました。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)

ホームページアドレス <http://www.ndl.go.jp>

■国立国会図書館 ■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331■